ダンドゥッの系図とタンジドル

目次

ダンドゥッの系図

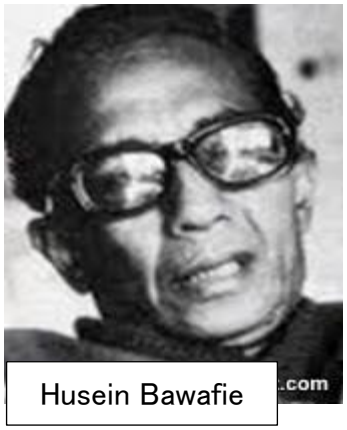
(1)　ダンドゥッ以前のポップス 3
(2)　ミナン人のバンド　グマラン 5
(3)　アラブ音楽　ガンブス 6
(4)　ヌサンタラのハドゥラミ 8
(5)　ガンブスの大流行 10
(6)　ムラユ・ディリ　ダンドゥッの始祖 11
(7)　ダンドゥッの隆盛 13

タンジドル

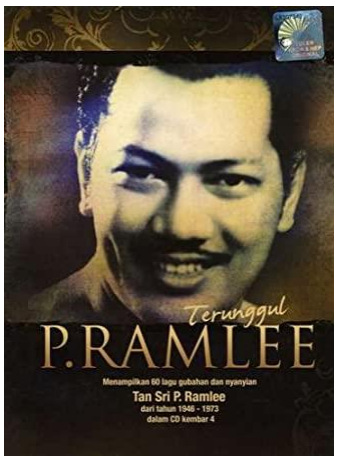
(1)　タンジドルとは 15
(2)　タンジドルの発端 17
(3)　ポルトガル人 19
(4)　メスティーソは国策 21
(5)　混血者のアイデンティティ 23
(6)　奴隷解放 24
(7)　パンパンガース軍楽隊 26
(8)　プガメン商売 28
(9)　陰暦正月のタンジドル 30
(10)　祭りのタンジドル 32
(11)　ティガソダラ 34
(12)　管楽器の骨董品 36
(13)　忘れられるタンジドル 38
(14)　難しいサバイバル 40
(15)　音が残らず名が残る 42

「ダンドゥッの系図（1）」（2021年03月05日）

元々はスタンブル Stambul 演劇の中で使われたデリ Deli のムラユ音楽がバタヴィアでの演劇公演に伴って流行したことから、それがダンドゥッの起源になった、とアルウィ・シャハブ氏は書いている。だからその当時の歌詞はムラユのパントゥン形式になっているのだそうだ。中には一曲で10分も15分も、延々と歌い演奏されるものもあった。


Husein Bawafie

第二次大戦前にランガムムラユ langgam Melayu 別名イラマムラユデリ irama Melayu Deli と呼ばれたこのジャンルでは、アライドゥルス SM Alaydrus がまず第一人者になり、次いで1950年代にはアライドゥルスの弟子だったフセイン・バワフィ Husein Bawafie が曲の形式にリフレーンを付けてモダン化を行い、さらにアスボン Asbon 率いるミナンのムラユ楽団グマラン Gumarang が歌詞に革命をもたらして一層のモダン化が進展し、世の中から喝采で迎えられた。パントゥン形式の歌詞はチンタ[1]を歌うシャイル形式のものに変わって行ったのである。

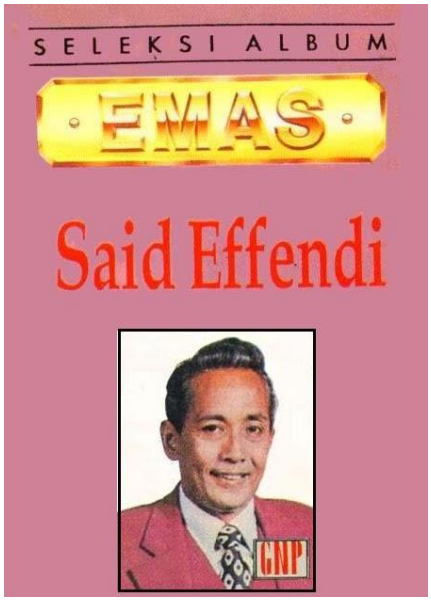


そのころ、現在のマレーシア半島部であるイギリス領マラヤで制作された映画と共にイラマムラユ流行歌がインドネシアに入って来て、ラムリ P. Ramlee とシプッ・サラワッ Siput Sarawak が大スターになり、ふたりが唄う歌が大いにもてはやされた。シプッ・サラワッは後に出た大歌手アニタ・サラワッ Anita Sarawak の母親だ。ふたりが出すヒットソングはリフレーン付きで歌詞もシャイル形式になっており、完全に時代の波に乗っていた。

ラムリは昨今のボリウッドスター、シャー・ルッ・カーン Shah Rukh Khan 並みの人気を取り、ラムリ主演の映画がジャカルタのクラマッ Kramat にあるリヴォリ Rivoli 映画館にかかると、何週間も大入りの日が継続したそうだ。ラムリがジャカルタに来たという噂が流れると、かれの姿を一目見ようとして、かれが泊っていると噂されたホテルを連日女性ファンが取り巻いた。ラ

[1] 恋愛

ムリに憧れて恋の病に落ちた17歳の娘の話が新聞に載ることさえ起こった。それはランプンのウダナ Wedana のお嬢さんだそうで、ひどく衰弱して危ない状況になっているという記事だった。国民的スターになったラムリにマレーシア政府は貴族の称号タンスリ Tan Sri を与え、またかれの没後にかれの名前を道路と公園に冠している。



インドネシアの歌謡界で当時トップクラスにいたサイッ・エフェンディ Said Effendi がムラユ楽団 Orkes Melayu「イラマアグン」Irama Agung を従えてマラヤ製イラマムラユをカバーした。その後を追って、ジャカルタにさまざまなムラユ楽団が誕生して大衆音楽界の覇を競ったことから、自ずとイラマムラユのジャンルは厚みを増した。

ジャカルタで、広範に散らばるカンプンでの祝祭や催事にムラユ楽団が招かれて、大音量で深夜までイラマムラユ音楽が流され、若者たちがジョゲッで踊り狂う習慣はその辺りが起源になったのかもしれない。それよりもっと多かったのは、結婚式での余興仕事だったそうだ。結婚式と言っても、もちろん立食パーティー式の披露宴であり、パーティーの賑わいに音楽が演奏され、招待客の中の男性ばかりがジョゲッしたという話だ。国営ラジオ局RRIにもムラユ楽団はしばしば出演した。

その時代に名前を挙げたムラユ楽団には、フセイン・アイディッ Husein Aidit 率いるクナガン Kenangan と歌手のハスナ・タハル Hasnah Thahar にジョハナ・サタル Johana Sattar。

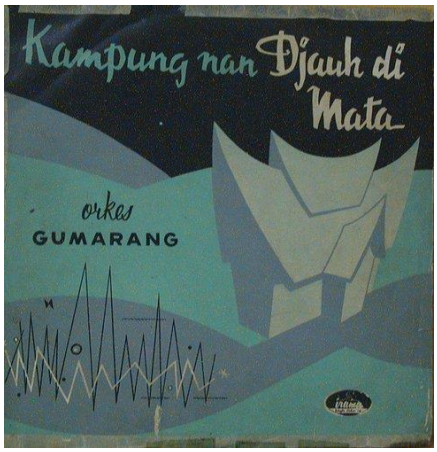
またフセイン・バワフィ率いるチャンドラレラ Chandralela 所属の歌手はムニフ・バハスアン Munif Bahasuan、マスハビ Muhammad Mashabi、エリヤ・カダム Ellya Khadam。この楽団には後にオマ・イラマ Oma Irama とエルフィ・スカエシ Elvie Sukaesih が加わっている。

このジャンルで永遠の金字塔をうち建てた大歌手エリー・カシム Elly Kasim を擁した、アスボン・マジッ Asbon Majid 率いるミナン人のムラユ楽団グマラン Gumarang。アブドゥル・ハリッ Abdul Chalik 率いるブキッシグンタン Bukit Siguntang は歌手スハイミ Suhaimi を擁し、ファウジ・アスラン Umar Fauzi Aselan 率いるシナールメダン Sinar Medan もイラマムラユの世界を賑わした。名前はメダンでも、この楽団はジャカルタのサワブサールに本拠を置いた。[続く]

「ダンドゥッの系図（２）」（2021年03月08日）

グマランもミナンカバウの楽団がジャカルタに進出してきたのでなく、これはジャカルタ在住のミナン人が編成した楽団だった。１９５４年初、ジャカルタ在住の十人近い若者がメンテンの一軒の家に集まり、故郷の音楽にロックンロールを融合させた音楽をやろうということに合意したのがグマランの発端だ。かれらはミナン音楽の記念碑的楽団プギブルハティ Penghibur Hati の後継者たらんことを目標にした。

かれらが付けた楽団名のグマランはミナンの説話チンドゥエ・マト Cindue Mato に出てくるキナンタン、ビヌアン、グマランの中から採ったものだ。初代リーダーには、仲間の間でアンワル・アニフが選ばれた。



当時の世界的なラテン音楽の流行に即して、グマランはラテン曲をレパートリーに採り入れ、またミナン音楽にラテン調の雰囲気を盛り込んで人気を呼んだ。楽団の力が安定してきたところで、かれらは次のステップアップとして国営ラジオ局RRIでの出演に挑戦した。世の中で名の知られていないセミアマチュアバンドをそのままオンエアーさせてくれるようなRRIではない。グマランはそのオーディションに合格し、念願のラジオ出演を果たした。

そこまで来て、最初のリーダー、アンワル・アニフは9カ月間でリーダーの座を降りることになった。アリディルが後継したが、しばらくしてアスボン・マジッがグマランに関わるようになり、かれがリーダーを交代してこの楽団を音楽史に名が残るものに育て上げた。グマランは国家宮殿・グドゥンクスニアン・イストラスナヤンなどの栄えあるステージや大会場で客を集めることのできる首都有数の楽団に成長して行った。

そのようにして新しいイラマムラユはジャカルタで大人気を博し、旧スタイルのイラマムラユデリは没落して行ったが、リアウやメダンでは旧スタイルの楽団や歌手が新登場して、反対に人気が盛り上がった。若手の歌手ヌライニ Nuraini が人気を集め、またメダンで新進作曲家リリ・スハイリ Lily Suhairy が新作を連発し、その中の Bunga Tanjung はマレーシアからシンガールまで含む広範なエリアで流行し、大ヒットになった。

しかしマラヤ製映画の黄金時代は長続きしなかった。インドネシアの映画制作界がマラヤ映画の輸入を禁止するよう、政府に圧力をかけたのである。ほぼ同じころにエジプトでナセルの王制転覆が起こったため、アラブ系ブタウィ人が大好きだったエジプト製映画も輸入が止まった。

困ってしまった映画輸入業界はインド製映画に矛先を向けた。インドネシア映画制作界はそれを甘く見た。吹き替えなど行われず、インドネシア語の字幕だけが付けられるのだから、ヒンディ語に堪能なインドネシア人以外はあまり関心を持たないだろう、という考えがかれらを油断させたようだ。

その当時、ほぼ唯一と言えるほどの大衆娯楽だった映画は、言うまでもなくビッグビジネスだった。1960年のマラヤ・インド・米国映画の年間観客動員数は4億5千万人に達している。その年、全国の映画館数は890あった。ところがオルラ期のインドネシア共産党が国民の映画鑑賞に共産主義宣伝を持ち込んできた。アメリカ映画はボイコットされ、中国や社会主義諸国が作ったイデオロギー宣伝映画を上映するよう圧力がかけられたのである。1966年には、営業している映画館は350まで減少した。

オルバ期に移行して、映画が国民大衆の娯楽の地位に復帰したが、そのうちにTV放送がはじまり、映画は斜陽の坂を転げ落ちて行った。1989年の年間観客動員数は3億1千2百万人に低下している。

1955年にラジ・カプール主演のインド映画アワラが封切られたとき、映画に飢えていたひとびとで映画館は埋め尽くされ、テーマ曲アワラフムは大ヒットになった。インドポップソングのビートのきいたリズムは人気を博し、イラマムラユのジャンルにも影響を与えた。

そのダンドゥッ成熟期に活躍した作曲家兼歌手にふたりの大物がいる。マスハビとムニフ・バハスアンだ。またフセイン・バワフィもその生涯で2百曲ほどの作品を発表した。スロジャ Seroja はその中のひとつだ。[続く]

「ダンドゥッの系図（3）」（2021年03月09日）

かれらはインド映画のヒット曲にインドネシア語の歌詞を付け、インドネシア人が誰でも歌えるようにした。特にマスハビはイラマムラユにインド映画のヒット曲が持っているビートを持ち込んで好評を博した。それが後に出現するダンドゥッの特徴をなすインド曲ビートとの融合の確立に大きく貢献したことは疑いがない。

1968年にマスハビが没してから、オマ・イラマ、ムッシン・アラタス Muchsin Alatas、エルフィ・スカエシたちがインドポップス風のビートに彩られたイラマムラユをひっさげて台頭してきた。その音楽がダンドゥッと呼ばれ、1970年代に一世を風靡するようになる。ダンドゥッという言葉は、インド歌謡曲のビートを擬音化した言葉だったと言われている。

１９０８年スラバヤ生まれのシェッ・アルバル Syekh Albar がアラブ音楽ガンブス gambus を携えてジャカルタに進出し、アラブ系住民を中心にして大好評を得た。かれのレコードは中東でもてはやされ、エジプトの伝説的ガンブス歌手アブドゥル・ワハブ Abdul Wahab に引けを取らない大歌手であるとさえ評された。シェッ・アルバルはインドネシアに昔からあったハドラマウトスタイルの伝統を持つガンブスをエジプトスタイルに変えることに貢献した。

１９２０年代にはシェッ・アルバル率いるガンブス楽団はよくラジオ放送に出演し、かれの自作曲が電波に乗った。シェッ・アルバルの後を追って、ハサン・アライドルス Hasan Alaydrus 率いるアルワタン Al-Wathan やムッタル・ルッフィ Muchtar Lutfi 率いるアルワルダ Al-Wardah などが産声を上げた。

アルバルの妻のファドルン Fadlun は１９５０年代に名を挙げた著名映画スターであり、映画プロデューサーのジャマルディン・マリッと結婚して娘を生んだ。その娘がカメリア・マリッ Camelia Malik だ。一方、シェッ・アルバルとの間で生まれた息子のアッマッ・アルバル Ahmad Albar はロック音楽の世界に飛び出して行った。このガンブスというアラブ音楽のジャンルがダンドゥッの祖先であるという説もある。

ガンブス gambus または qanbus はイエーメンの撥弦楽器であり、ウードに似ている。７世紀以来、中東の商人がヌサンタラの地にやってきたとき、かれらは交易物産だけでなく、自分たちの慰安のために楽器をも持ってきた。その文化交流はスマトラ島海岸部にアラブ音楽の一端を植え付けた。商人たちは併せてイスラム布教を行ったし、また、ヌサンタラに住み着いて原住民をイスラム化しようとする布教者もやってきた。かれらが宗教の傍らで音楽をも地元民に教えたとき、地元民の音楽世界にアラブ音楽がしみこんで行った。地元民が奏でるローカル音楽の中に、ガンブスや他のアラブ音楽用の楽器が使われることもあったのではあるまいか。古いムラユ音楽がそのリズムや旋律の影響を受けたのは自然の成り行きだった言えるだろう。

１８６９年にスエズ運河が開通してエジプトやイエーメンにその航路の寄港地ができると、ヨーロッパとアジアを結ぶ蒸気船に乗る機会がエジプト人やイエーメン人に大きく開かれた。当時ハドラマウト Hadramaut と呼ばれていた南イエーメンから、大勢のアラブ人がヌサンタラに移住した。

ハドラマウトというのは、１９世紀後半から２０世紀初期にかけてハドラミ Hadhrami と呼ばれるアラブ

系種族が支配した、バーレーン・カタールからアブダビ・ドゥバイ・オマーンを回ってアラブ半島南海岸部のアデンに至る広大な地域を指している。その根拠地は現在の南イエーメンにあった。諸説あるハドラマウトの語源の中に hadir-maut というおどろおどろしいものがあるのは面白い。

１870年から1888年にかけて、たくさんのアラブ人がオランダの蒸気船に乗ってヌサンタラにやってきた。やってきたのは男ばかりであり、プリブミの女を妻にして家庭を持ったから、アラブ系インドネシア人というのはまず間違いなくプリブミとの混血者だ。

その点では華人プラナカンとそっくりの状況になっており、インドネシア人はかれらをアラブプラナカン peranakan Arab と呼ぶ。プラナカンという言葉は華人系原住民子孫だけを指しているのではない。
[続く]

「ダンドゥッの系図（４）」（2021年03月10日）

かれらハドラミはヌサンタラのあちこちの都市にアラブ村を作って居住した。周辺のプリブミ社会がイスラムコミュニティなのだから、アラブコミュニティはプリブミ社会に容易に溶け込み、華人コミュニティであるプチナン pecinan が持っている周辺プリブミ社会から浮き上がった印象とはまるで正反対の趣がアラブ村に付着している。

ジャカルタのプコジャン Pekojan やクルクッ Krukut、ボゴールのンパン Empang、スラバヤのアンプル Ampel、ソロのパサルクリウォン Pasar Kliwong、グルシッのガプラ Gapura、モジョクルトのカウマン Kauman、チルボンのカウマン、ヨグヤカルタのカウマン、マランのジャガラン Jagalan、プロボリンゴのディポヌゴロ Diponegoro、ボンドウォソやバンジャルマシンにはその名前ずばりの Kampung Arab などが顕著なカンプンアラブになった。そればかりか、バンダアチェ、パレンバン、シグリ、メダン、ランプン、マカッサル、ゴロンタロ、アンボン、マタラム、アンペナン、スンバワ、ドンプ、ビマ、クパン、果てはパプアにまでアラブ村が存在している。

本来人類学的には同種のアラブ人であっても、ハドラミは文化的差異によって他のアラブ人から区別され、同じハドラミも信仰・信条・家系などによってアラウィとカビリに区別されることがある。

一説では、ハドラミは本元の南イエーメンにあまり残っておらず、ヌサンタラに移住して子孫繁栄を得た移住組の方が量的に本元を圧倒しているという話だ。アニス・バスウェダン現ジャカルタ都知事の祖父アブドゥラッマン・バスウェダンは1908年スラバヤ生まれのハドラミであり、インドネシア独立革命期

に活躍したひとりだ。既述のシェッ・アルバルもスラバヤ生まれのハドラミである。

Snouck Hurgron

オランダ東インド植民地政庁の顧問で、ヌサンタラのアラブ事情を詳しく研究し、その名声をスノーク・フルフロニェ Snouck Hurgronje と二分したファン・デン・ベルフ van den Berg によれば、ハドラミの移住はまずインドのマラバール海岸に向かい、その後ヌサンタラにやってきた。最初はアチェを目指し、そこからパレンバンやポンティアナッに流れた。１８１９年にシンガポールが建設され、シンガポールがアチェの地位を奪って発展するようになると、移住者はアチェをやめてシンガポールを中継地にし、そして移住者の流れもジャワに向かうようになった。東部インドネシア地方に入るようになるのは、１８７０年代以降だったそうだ。

アラブ人移住者がプリブミ女性を妻にして子供を持つと、父方のアラブ系親類縁者と母方のプリブミ系親類縁者の文化的融合が起こることも稀でなかった。父方に親類縁者がいなければ、父の文化をその子供が母方の親類縁者に媒介した。こうしてプリブミの中に、アラブ音楽の演奏になじむ人間もたくさん出るようになる。

ガンブスをフィーチャーし、バイオリンやハルモニウムを加え、そして多彩な打楽器でリズムを盛り上げる楽団がガンブス楽団、略して単にガンブスとも呼ばれた。結婚パーティや割礼の祝いはしばしばガンブス楽団が活躍する舞台になった。楽団はぶ厚いペルシャ絨毯に座り込んで演奏し、その前で踊り手がザピンの舞を踊った。

１９４０年代から６０年代まで、ガンブス楽団はジャカルタやスラバヤだけでなく、マカッサル、パレンバン、バンジャルマシン、ゴロンタロなど各地のアラブ村に現れた。しかも、楽団員にはアラブの血の混じっていない純血プリブミが多数含まれていた。ガンブス音楽がプリブミの間に深く根を張ったことがその事実から分かる。

その時期にエジプトスタイルの音楽がガンブス音楽界に新しい潮流を作り、ハドラマウト風伝統タイプとの二分が起こった。シェッ・アルバルはエジプトスタイルの源流のあたりにいる。[続く]

「ダンドゥッの系図（５）」（2021年03月12日）

これは音楽が社会現象であることを如実に示すものだ。音楽に娯楽や慰安を求めるひとびとと、ガンブスが旧来から背景として持っていた宗教的な様式から離れることが宗教的意味合いを薄めることになると考えるひとびとの原則に関わる相克がこの分裂を起こしたように思われる。とは言っても、進歩派も相変わらずイスラムの宗教的原理や様式の中にいて、われわれの目から見るなら、目くじら立てるほどの原理原則の変化が見られるわけでもないのだが。

ジャカルタでは、プコジャンで１９４７年にフセイン・アイディッがガンブス楽団アルシシャアグ Al Usysyaag を率いて登場し、大衆の人気を集めた。この楽団はアラブ音楽だけでなくムラユ音楽もレパートリーに加えてプロの道を驀進し、１９５０年代になってからムラユ楽団に変身してオルケスムラユクナ~ガンと名を変えた。

ガンブス楽団からムラユ楽団を経て１９７０年代にダンドゥッが新ジャンルとして音楽界に台頭してきたその長い流れを通して、且つまた、もっと古い時代にガンブス音楽がムラユ音楽に与えた影響を通して、ガンブスがダンドゥッに結実したのである、というのがガンブスのダンドゥッ出産説のようだ。フセイン・アイディッの楽団がガンブス→ムラユ→ダンドゥッという変遷を身をもって体現したことも、その印象を強める結果をもたらした可能性は高い。

１９７０年代になると、ジャカルタに加えてチルボン、トゥガル、インドラマユ、マカッサル、ゴロンタロ、パレンバンなどにガンブス楽団が輩出した。さらにエジプト映画が人気を呼んで映画の中で歌われる曲もヒットした。ウンミ・カルソウム Ummi Kalsoum、アブドゥル・ワハブ Abdul Wahab、ファリッ・アラトラス Farid Al-Atras たちエジプトの俳優歌手にもファンが付いた。

昔、ガンブス演奏は伝統的様式のまま行われるのが普通で、楽団や踊り手はガミスを着た男性ばかりであり、観客が飛び入りで踊る場合も男性しか人目を浴びる場所に出て来なかった。楽団が衣装や楽器で発出させる雰囲気が伝統的なものであることで古来からの宗教性が維持されるという観念に対して、進歩派がその様式をモダン化することで時代に応じた革新を呼びかけたというのがガンブス楽団の潮流分裂の本質だろう。

進歩派楽団にしても、スーツを着て椅子に座り、折り目正しく控えめで慎ましやかな姿勢を崩さない。音楽もキーボード、エレキギター、エレキベース、ドラムなどが加わったが、西洋音階の音から四分の一音高いアラブ音楽特有のシカも守られている。ソフトなダンドゥッビートを加えてノリを高め、歌手は軽いステップでゴヤンするようなものが進歩派ガンブス楽団のスタイルになった。この進歩派ガンブス音

楽では、女性歌手が歌うこともあれば、楽団の前に女性観客が飛び入りして踊ることすら起こるようになり、ついにはジャカルタでソラヤ率いる女性ガンブス楽団まで誕生している。

結婚パーティや祝祭も、主催者が進歩派か守旧派かで彩りががらりと変わるものになった。ところが、そこに招かれて演奏しているのがどちらもガンブス楽団だと言われると、事情を知らない人間は目をパチクリすることになるのである。

２000年１月にジャカルタのTIMでコンサートを開いた東ジャワ州ジュンブルのガンブス楽団バラシッのステージには、アラブ系の青年男女が詰めかけて賑わった。青年でないひとびとも加えて、観客の９９％がアラブ系だったとそのときの記事は述べている。

そのときに多数の関係者が驚いたのは、普段からおとなしく影に隠れて人前で目立つ振舞いをしないイメージが濃厚だったアラブ系の娘たちが、招かれたふたりのゲスト歌手がエジプトのスタンダードヒット曲ハビビヤヌルルアインを歌い出すと、その場で身体をゴヤンさせながら手拍子を取り、大声で一緒に唄い、ヒステリックな叫び声をあげ、ジョゲッに我を忘れる姿を目にしたことだった。[続く]

「ダンドゥッの系図（６）」（2021年03月15日）

ブタウィ史家のJJリザル史はダンドゥッの歴史について、次のように説いている。冒頭のアルウィ・シャハブ氏の論説と重複する部分もあるが、ご容赦願いたい。

tanjidor

ダンドゥッの社会的感情やそのためのツールは起源をオランダ植民地時代当初までさかのぼることができる、とウィリアム・H・フレデリックはロマ・イラマとダンドゥッスタイルと題する論説に書いている。バタヴィア周辺の農園主であるオランダ人トアンが出歩くとき、その行列に華やかさを添えるためにトアンが奴隷たちに作らせた合奏団タンジドール tanjidor がその発端になったのだと言う。そこではインドネシアとアラブと西洋の楽器がごちゃ混ぜに使われて音楽を奏でた。

１９世紀にはガンバンクロモンと呼ばれる中華風アンサンブル、そして都市部で人気を呼んだスタンブルやトニールの中で使われたクロンチョンも影響をもたらした。１９４０年代には、古いハーモニースタイルに西洋音楽の新機軸が加えられて、イラマムラユモダン化の実験がさまざまに試みられた。サンバやルンバのリズムも取り込まれた。

１950年代になると、独立インドネシアにとってのパンインドネシア主義のよりどころを民族オリジナル文化に求めようとする政治情勢に押されて、パダンやメダンなどジャカルタから遠く離れたへき地で発展した伝統的ムラユ楽団の世界にモダンクロンチョンミュージシャンたちが入って行った。その音楽がムラユデリと呼ばれた。

１953年にイギリス領マラヤの俳優ラムリが主演するジュウィタ Djuwita と題する映画がインドネシアで大ヒットし、かれのヘアスタイルばかりか映画で歌われたムラユデリ曲も大いに流行した。

それにヒントを得て１959年にサイッ・エフェンディがミュージカル映画スロジャを作り、主演して自作の曲を唄った。こうしてかれがインドネシア側の巨匠にのし上がった。アブドゥル・ハリッ、フセイン・バワフィ、ハスナ・タハルたち同時期の自作自演歌手たちと共に一世を風靡することになる。

その後を追って登場したエリヤ・カダムが Boneka dari India の大ヒットを飛ばし、当時ダンドゥッという言葉はまだ使われていなかったにも関わらず、それをダンドゥッの起源に奉る者も少なくない。

その大ヒットは作曲者フセイン・バワフィの絶妙な曲想とアレンジの成果だった。オーケストレーションにインドネシア・アラブ・インドのグンダン gendang と笛・シタールを使ってインドポップスのビートの効いたリズムを特徴的に奏でさせたことが大衆に大いに受けた。当時、インド映画の中で流れるインドポップスはインドネシア大衆の人気の的になっており、それがイラマムラユと融合したことで絶大な人気を博したのである。

ジャカルタ郷土史家リッワン・サイディ Ridwan Saidi 氏が１919年生まれのフセイン・バワフィをジャカルタムラユ音楽の創始者と評するのも、そこに原因があるのかもしれない。１950年代のジャカルタで起こったムラユ音楽の種々の革新が、それまでもっと北の地方の、言い換えるならジャワ島外の、音楽だったイラマムラユの中心地をジャカルタに移動させることになったのである。

５0年代には、ジャカルタに国民級の有力ムラユ楽団が勢ぞろいしていた。ウマル・ファウジ・アスラン率いるシナールメダンは歌手アブディラ・ハリス Abdillah Harris を擁して Kudaku Lari をヒットさせ、ハスナ・タハルは Chayal Penyair、ムニフ・バハスアンはデビュー曲 Ditinggal Kekasih を打ち上げた。

フセイン・アイディッ率いるクナ~ガンはヒット曲 Aiga、アブドゥル・ハリッ率いるブキッシグンタンは歌手スハイミを擁して Burung Nuri、Halimun Malam、Cinta Sekejap などのヒットを放ち、サイッ・エフェンディがリーダーのイラマアグンは Khayalan Suci といった代表曲をものした。[続く]

「ダンドゥッの系図（終）」（2021年03月16日）

それらのさまざまなムラユ楽団が市場を賑わす中で、1930年代以来数百の作品を世に送ったフセイン・バワフィ率いるチャンドラレラは歌手にマスハビやムニフ・バハスアンを抱えて、ジャカルタの大衆娯楽界にイラマムラユのゆるぎない一角を築き上げ、町内に必ずひとつはイラマムラユの音楽グループがあるという姿を実現させた。

ジャカルタにムラユ音楽を興隆させてジャカルタムラユ音楽というジャンルを築いたかれの功績は筆舌につくしがたいものがある。ジャカルタ式ムラユ音楽にはチャルテやタブラと呼ばれる独特の打楽器奏法があって、デリやマラヤとは異なる特徴を持っている。また、デリやマラヤのムラユ楽団はガムランのゴン gong を常に備えているが、ジャカルタのムラユ楽団はゴンを使わない。

ダンドゥッの起源を語るとき、われわれはそのジャカルタムラユ音楽に特に注目しなければならないのである。イラマムラユデリがたどった変遷の歴史が行き着いたダンドゥッは、ジャカルタで進展した質的変化に触れなければ正確なストーリーが描かれないのだ。

加えて、逆の見解が述べられているマクロ的要素も存在している。60年代に入って、西洋のロック音楽が都市部で興隆したためにムラユ音楽が片隅に追いやられたというのは当を得ていない。政府は西洋音楽の国民社会への侵入に対抗するために民族性の高い音楽を求め、西洋大衆音楽を否定しようとした。その政治の指向が一部国民ミュージシャンをイラマムラユに向かわせたのである。

西洋音楽の代替となる大衆音楽というイデオロギーがかった政治的要求に染まっていた国民社会を、それはかなりのレベルで満足させることができた。国民指導者は~ガッ~ギッ~ゴッ音楽と呼ばれるインドネシア民族の個性と倫理観を損なう西洋大衆音楽の排斥を目指し、しかしただ排斥し撲滅するだけでは収まらない空白を埋めるために、民族性の香り豊かな音楽を振興させようとしたのだ。

1965年にG30S事件が起こり、スカルノとその実験的政策のすべてが終焉したあと、西洋音楽輸入禁止政策が生んだ空白を満たそうとするかのように、怒涛のように流れ込んできた西洋のロック・カントリー・ポップス音楽がムラユ音楽の上にのしかかってきたのである。ムラユ音楽が地べたに這いつくばったのはその時期なのだ。

スハルトのオルバ政府が経済の門戸を西側世界に開こうと準備しているときに、イギリスのロック音楽への扉がいち早く開かれた。その冷遇の時代を超えた1970年代に、新時代を画する新ジャンルの音楽としてダンドゥッが勃興してきた。中央ジャカルタ市トゥブッ Tebet を故郷にするひとりの若者ロマ・イラマ Rhoma Irama がその勃興の中心にいた。ロマは楽団を完全エレキ化し、演奏の舞台をシアター風なものにし、実生活に即した活力を感じさせる歌詞を唄った。かれはデビュー当初の名前をオマ・イ

ラマにしていたが、後にロマに改名した。

更に重要なポイントとして、ロマの楽団はムラユ楽団を称さず、ソネタグループ Soneta Group という名称にした。当時の実業界でコングロマリットが自社を呼ぶときに使ったシナールグループやカルティニグループのような言葉を取り上げたということだ。強い市場オリエンテーションを持つ実業界のムードが、ロマのバンドに付着した。

いかにかれらが、ビジネス時代への変化にぴったりとフォローし、マスメディア時代の情報技術に即した意識を涵養していたかということがそこに示されているようだ。その一方で、ロマ・イラマのダンドゥッとイスラム教のきわめて複雑な関係も、１９７０年代に深まって行った貧富格差を含む社会問題の実態がそれを方向付ける背景になった。ダンドゥッは１９７０年代の時代を画するフィノメナルな社会現象だったのである。[完]

タンジドル　西祥郎著

「タンジドル（１）」（2023年10月02日）

ブタウィ[2]の伝統芸能のひとつに西洋風の吹奏楽隊がある。西洋で生まれた金管楽器を主体にして、打楽器とのアンサンブルでディアトニック（西洋音階）の音楽を演奏するのが標準だ。しかも演奏はほとんどオープンエアーが舞台で、路上行進することもあるから、要するにブラバンの一種と考えればよいだろう。古い時代の西洋にあった小規模軍楽隊という印象を持ってもかまわないとわたしは思う。この楽隊の標準編成は十人前後だが、時と場合によってはその半分くらいで出演することもある。

イ＿ア語ウィキペディアには楽隊が使う楽器のリストが記載されている。管楽器： Trompet, Trombon, Piston, Klarinet, Baritone, Mellophone, Eufonium, Tuba, Sousaphone,

打楽器： Snare drum, Drum bass, Quarto, Cabasa, Simbal, Marakas, Xylophone, Marimba, Vibraphone,

管楽器は最低でメロディ・伴奏・低音の三つ、そして打楽器にバスとスネアがそろえばたいていの曲は一応の格好がつくだろうから、多分それが最小催行人数になるのではあるまいか。もっと減っても音楽は鳴るだろうが、下手をするとチンドン屋になりかねない。観客がチンドン屋を聞きたいと言うのなら、それはそれで構わないのだが。ちなみにわたしはチンドン屋もアートであると考えているので、決して蔑視しているわけでないことを付け加えておこう。

この芸能は明らかに西洋人がヌサンタラに持ち込んでそれを丸ごとプリブミに模倣させたものである

[2] ジャカルタの原住民でバンドン中心のスンダ人とは異なる言語と文化を持つ。

と考えてよいように思われる。タンジドルというのがこのブタウィの伝統芸能の名称だ。タンジドルはその楽隊を指し、それが演奏する音楽をも意味している。現代インドネシア語では tanjidor と綴られ、略して tanji とも呼ばれている。

タンジドルの語源はポルトガル語の tanger（タンジェル）であるというのが定説になっている。タンジェルは「音楽を演奏する」という意味であり、そして屋外で音楽演奏することを tangedor（タンジェドル）と言うらしい。ということは、ブタウィ人の伝統芸能になった軍楽隊もどきをポルトガル人がプリブミに教えたのだろうか？

ブラス製の楽器が楽隊のメインを占め、木管楽器はせいぜいクラリネットだけ。日本ではチンドン屋がクラリネットからサクソフォンに持ち替えたが、ブタウィではそれが起こらなかったようだ。サックスが標準編成に加えられることはなかったように見える。確かに、ポルトガル人がヌサンタラにやってきたころ、サクソフォンはまだ発明されていなかったのではなかったろうか。

楽隊というのは本来が野外演奏を目的にしたものだ。ブタウィ人のタンジドルも演奏しながら路上を行進し、また庭や道路脇に椅子を並べて音楽を奏でるのが普通だった。現代ではもちろんコンサートホールや劇場で吹奏楽団が演奏することもあるわけで、ブタウィのタンジドルも屋内演奏をしなかったとは言えないと思うが、これは何が標準なのかという話をしている。

東南アジアの歴史を眺めるなら、国家民族を背負ってアジアに集団でやってきた西洋人の事始めであるポルトガル人は軍隊と軍楽隊を伴っていたし、かれらが行ったカトリック布教によって教会で音楽に包まれた宗教儀式が営まれたのだから、東南アジアにはじめて伝えられた西洋の音楽と演奏形態もポルトガル人がもたらしたことは間違いないように思われる。だからわれわれの知性は、その楽隊の名称がポルトガル語源だということを大いにありうるものとして受け入れ、納得するのである。

ところが奇妙なことに、ブタウィの伝統芸能としてのタンジドルの由緒来歴はVOC時代のオランダ人

にまでさかのぼって語られているだけで、ポルトガル人の姿がどこにも出て来ないのだ。[続く]

「タンジドル（２）」（2023年10月03日）

１984年発行のインドネシア百科事典には、タンジドルの語源は「弦楽器の演奏グループ」を意味するポルトガル語のタンジェドルだと書かれている。現代インドネシアでタンジドルという言葉は、管楽器を演奏する楽譜の読めないストリートミュージシャンのニュアンスで使われる傾向にある。ブタウィ人はタンジという単語を音楽や曲の意味で使うことがある。吹奏音楽隊の語感はそこにない。

オランダ人歴史家はタンジドルについて、「その祖先が出現したのはVOC時代だった」

「ご主人様が奴隷にそれぞれの楽器演奏の任務を与え、楽隊演奏をかれらの仕事にした」

などと説明している。インドネシア人歴史家もタンジドルの源流について、VOCが築いた都市バタヴィアの発展史において、城壁に囲まれたバタヴィア城市内での生活が不健康さを増したために住民が城壁の外の南部地域にヴィラを作って住むようになった１８世紀初期から中ごろにかけての時代が発端だと解説している。

VOC高官たちは南部地区のジャングルを開いて明るく広い空間と澄んで健康的な空気に満ちた居住エリアを作り、そこに豪壮なヴィラを建てて住み、百人を超える奴隷をそのエリアに住まわせて栄耀栄華な暮らしを愉しんだ。そんなオランダ人の代表者のひとりが脱バタヴィア城市初期の著名人、コルネリス・シャステレインだったと見て良いだろう。

シャステレインは１６９１年から１７０４年までバタヴィア南部のあちこちを切り開いて農園や牧場を作り、最終的に現在の西ジャワ州デポッ市中心部の大地主となった。かれは没する前に自分の奴隷をすべて自由人にし、デポッを解放奴隷の村にした。

その後VOCの諸高官たちもチリリタンブサール・ポンドッグデ・タンジュンティムール・チセエン・チマンギスなどに村を作り、そこでは地主のご主人様が催す晩餐会や園遊会にヨーロッパ音楽を奏でて招待客を愉しませることが行われた。西洋の管打楽器を使って西洋音楽を演奏したのはご主人様の奴隷たちだったのだ。ご主人様は奴隷に楽器演奏を学ばせてトランペット担当奴隷やチューバ担当奴隷などに任じ、楽隊を作らせた。楽器を演奏していれば必ず飯が食えたのだから、自分もその時代の楽隊奴隷になりたいと思った管楽器演奏好き読者はいらっしゃらないだろうか？

そんな奴隷楽隊員が1860年の奴隷制度廃止によってオランダ人トアンの下から去り、仲間たちと楽隊稼業を始めたのがタンジドルの祖先であるというのが歴史的経緯だそうだ。実際にブタウィのタンジドル楽隊はほとんどがカラワン・ブカシ・チビノン・タングランなどのジャカルタ辺縁部にいて中心部には見当たらず、また1894年にオランダで作られた金管楽器が現存するタンジドル楽隊に残されているといった事実がその説をバックアップする傍証となっている。

タンジドル楽隊員は楽譜が読めないのが普通であり、演奏レパートリーは先祖代々耳伝えで伝承されてきたものだ。だから現代タンジドル楽隊のレパートリーには現代インドネシア人になじみのない、古いオランダ曲がたくさん残されている。こんなタイトルの曲を知っているインドネシア人がどれほどいるだろうか。

Batalion, Kramton, Bananas, Deisi,

Welmes, Was Tak-tak, Cakranegara...

もちろんブタウィのエバーグリーン歌謡もタンジドル楽隊のレパートリーに入っている。

Jali-jali, Surilang, Kicir-kicir, Cente Manis, Stambul, Parsi...

だったら、ブタウィのタンジドルという楽隊とその音楽は元々ポルトガルの音楽あるいは楽隊との直接的な関係を持っていなかったということにならないだろうか？オランダ人がバタヴィアで始めた音楽隊とその音楽スタイルにどうしてポルトガル語のタンジドルという名称が付けられたのか、これはわれ

われを途方に暮れさせる謎のラビリンスになってしまいそうだ。ひょっとしたら、これも物自体と名称の来歴が異なる由来学の一例なのだろうか？わたしが主張しているジャガイモの由来のように。[続く]

「タンジドル（３）」（2023年10月04日）

ポルトガルに由来するインドネシアの音楽について触れるなら、ファドが源流と言われているクロンチョン[3]が思い浮かぶ。クロンチョン音楽発祥の地とされている今の北ジャカルタ市トゥグ[4]地区は1661年にVOCバタヴィア市政がポルトガル人解放奴隷を入植させた土地だった。ポルトガル人奴隷はカトリック教を捨ててプロテスタント教徒になることで奴隷身分から解放されたのだ。

イベリア連合を打倒する戦いをアジアで展開していたVOCは1641年にマラカを陥落させてその地を奪った。VOCはマラカばかりか、ポルトガルの拠点になっていたインド洋沿岸から南シナ海に至るあちこちの港市を奪うことにも努め、ポルトガル人捕虜を奴隷にしてバタヴィアに送り、新都市の建設と運営のための労働力に充てた。誤解を避けるために、バタヴィアの奴隷人口はマルク地方やバリ島などの原住民が圧倒的に多数を占めていたことを付け加えておこう。ポルトガル人奴隷の発生は別の目的に付随して起こった副作用だったと言える気がする。VOCがポルトガルの既存コロニーを次々と奪い取って行ったのは、商業メリットの追求だけが目的ではなかったのである。

統一国家が形成される前の北ヨーロッパ低地地方はスペインハプスブルク王家の支配下にあった。スペインがポルトガルを従えてイベリア連合を形成したとき、現在のオランダ王国を構成している各州はスペインの支配から独立する運動を進めていた。

オランダ人にとっては、自分たちの父祖の地に君臨しているスペインからの独立運動を成しとげるた

---

[3] Kerongcong

[4] Tugu

めに、スペインがポルトガルの富を吸い取って肥るのは絶対にさせてならないことだったはずだ。ポルトガルの富を枯渇させることは、オランダ人の富を増やすと同時に本国の独立に貢献するという一石二鳥になる。オランダ船がポルトガル商船を襲う海賊行為を盛んに行ったのは、そういう政治的な背景のためだった。

ここで使われているポルトガル人という言葉の内容が誤ったイメージを誘う懸念をわたしは強く感じている。人類の過去の歴史においてXX人というのは人種的な基準で使われるのが普通だったからだ。だからポルトガル人という言葉は多分、ヨーロッパ大陸西端にある土地をその母国にし、そこで生活し、そこで自らの文化を育んだ白人種を読者に想像させるのではないだろうか。ヨーロッパにおけるポルトガル人はそれで間違いないのだが、アジアにいるポルトガル人というのはそうでなかった。

小国で人口も少なかったポルトガル王国がアフリカ～アジアに渡洋進出したとき、人的資源の対策は重要な問題になっていた。ポルトガルの軍船は要所に位置する港市を軍事攻撃して征服し、そこをポルトガルのコロニーにした。とは言うものの、自国民をコロニーに送り込んでそこで生活させ、そのコロニーを恒久的に自国の領土にするという方法が容易に行える国とそうでない国があったはずだ。16世紀はじめごろの、わずか100万から多くてもせいぜい140万人程度の人口しかないポルトガル王国は、コロニー住民を国外で賄う方針を採った。

異郷のアジアにある港市を征服したポルトガル人兵士たちは、戦後処理を一段落させると捕虜にした原住民の女をあさり始めた。それは太古の昔から直立歩行するサルたちが行っていた行為と何の違いもない。村と村の間の戦争は食糧をはじめとする財、労働力、そして女の略奪を目的にして行われていたはずだ。ただ、そのあとが違っていた。ポルトガル人の女あさりは男の性欲処理を越えて、子供を作り育てることが実質的な目的になっていたのだ。ポルトガル人は征服地で地元の女に産ませた子供を育て、非白人とポルトガル人の混血者を量産することを図ったのである。その混血者たちはメスティーソと呼ばれた。

［ 続く ］

「タンジドル（４）」（2023年10月05日）

一般的な戦争では、敗者の側の人間は男も女も大人も子供も捕虜にされ、捕虜はたいてい奴隷にされた。勝者の側の男たちは手に入れた女奴隷を使って性欲処理をした。奴隷は所有者の持物であり、動産なのだ。持ち「物」だから人間として扱う社会的義務がない。その現実を受け入れるために自分を人間でなく「モノ」であるという自己催眠にかけて一生を送った奴隷もいたことだろう。人間のそんな心理的側面を社会生活の中に確立させた奴隷制度も人類の遺産なのである。それが全人類の社会制度の中から消滅したというのに、同じようなことをしている自由人は相変わらずちらほらと存在しており、心の中の奴隷が全人類の生き様からいなくなる気配はいまだに感じられない。

戦争するために編成された軍隊は男ばかりだったのだから、攻め込んで征服した相手人種の女を性欲処理の対象にするのは人間の本能にもとづく行動だったにちがいあるまい。そうすると奴隷女の中に妊娠する者が出たはずだ。

人類の長い歴史の中で数限りなく起こったそんなできごとにおいては、生まれた子供は母親の手の中に置かれて奴隷にされるケースが標準だったのではないかとわたしは考えているのだが、現代人の感覚を踏まえてそのポイントを見るなら、その意見に同意しないひとの方が多いかもしれない。

現代の男性の多くは、たとえ賤しい奴隷女が母親であってもその子は自分の子供だという気持ちを強く抱くのではないだろうか？だがしかし、現代人の男親が持つであろうその感覚はせいぜいここ百年あまりの間に普及したものではないかという気がわたしにはするのである。昔の男が持っていた非情さが、文明化やヒューマニズムといった名前の下で誘導された「男性の女性化」によって社会的に変質した印象をわたしは抱いている。男として優れていると昔は称賛されていた、自分であれ他人であれ、人間の「（優れた・美しい）死」に向かって邁進する男の姿も非情なものだったではないか。わたしはここで男性の精神的女性化現象を指摘しているだけであって、その現象を非難も告発も断罪もしていないことをお断りしておきたい。どうか誤解なきように。

もちろん、歴史の中に掃いて捨てるほど起こったこの種のケースの中には、父親がその子を母親から取り上げて自分の文化の中で養育し、子供は自分を父親と同じ人種の純血者と思って大人になったり、あるいは出生の秘密を知りながらそれを世間にひた隠しに隠したあげく社会的有力者になって一生を終えるようなことも起こっている。オランダ人が征服した東インドにはそんなオランダ系プラナカンのストーリーが実話としていくつも語られている。

語られていないものごとはなかったから語られていないのだという解釈をあらゆるものごとに当てはめるべきではないだろう。そのロジックはもちろんありうるものの、語られたのはそれが珍しいから語られたのであり、珍しくないものごとだから誰もわざわざ語ろうとしなかったというケースもあったはずだ。そのビヘイビアはひとの世の古今東西の常識のひとつではないかとわたしは思う。

それが多かったのか少なかったのかという量的な問題はよく分からない。しかしポルトガルコロニーに関する限り、奴隷女に産ませた子供をどうするかは個人の利害得失や感傷あるいは信条の問題とされず、国家方針がもたらした社会構造に関わるものになっていたはずであり、必然的に子供たちはすべてポルトガル文化の中で育てられるようにコロニーの中が統御されていたのではないかと推測される。少なくとも、そのポイントに関する合目的性が通念として尊重され、それを踏まえて社会生活が営まれていたのではないかとわたしには推測されるのだ。

混血児は父と母の血が等分に入り混じった人間であり、文明を異にする父と母に育てられるメスティーソは異なる価値観を浸透させられることになる。両親が示す善悪・正邪・貴賤・優劣などの価値観に関する態度が衝突するとき、子供は自分が従うべき側を選択しなければならなくなる。そのような選択行為が子供の自己アイデンティティの形成に大きい影響をもたらすはずだ。[続く]

「タンジドル（５）」（2023年10月06日）

しかしその選択の自由を子供に与えると、母の文化を自分のアイデンティティにする子供が何らかの確率で出現する結果にならないだろうか？そんなことになればポルトガルコロニー存立の基盤に関わる問題が起こりかねない。父の文化こそが完璧な善・正・貴・優であり、母の文化は悪・邪・賤・劣であるという基準を家庭の中に持たせるには、男優女劣家庭、つまりは父優母劣家庭にするのがもっとも有効だったように思われる。

男優女劣社会は男優女劣家庭を生み出し、男優女劣家庭が男優女劣社会を作るという相関関係にあるのだから、１５～１６世紀ごろのポルトガルがどれほど男優女劣社会だったかということ次第で、特別な仕組みなどはなにも必要でなくなるかもしれない。しかし人間は千差万別なのだ。

インドネシアに代々住んでいる華人プラナカンの中に、父の文化を継承して中華文化の中に浸って生活し続けている子孫がいる一方で、父の文化を継承しないで母の文化に従った子孫もたくさんいる。見た目はまるっきり華人だが、ムスリムで普通のプリブミのような生活をし、中国語や中国文化と無縁の暮らしをしているひとびとがいるのだ。どんな事情や導因によってそうなったのか分からないものの、強制力を働かせず個人の自由選択に委ねればそんなことが起こるのではないだろうか。

政治的軍事的な征服者である父とその被害者としての被征服者の母はそれ自体で既に男優女劣家庭の基本構造になっている。とはいえ、それが必ず父優母劣になるかどうかは人間次第だろう。ましてや劣者の母に対する同情心が子供の心に湧いたとき、それをどうやって止めようというのだろうか？

ポルトガルコロニーに反逆児が出たのかどうかはよく分からない。しかしアジアのポルトガルコロニーがアジアにおけるポルトガル繁栄の世紀を支えたのは歴史的事実なのである。ポルトガル王国のコロニー方針は成功していたと見て間違いないように思われる。

行ったこともなければ見たこともない祖国への忠誠を大多数のメスティ―ソに誓わせたアイデンティティ形成がどんなメカニズムで成し遂げられたのか、人間の精神操作・心理操作という面から、これは

興味深いテーマになりそうだ。

征服されてポルトガルコロニーになった港市で半世紀ほどが経過し、純血ポルトガル人第一世代が死に絶えてしまったあと、そのコロニーを運営するひとびとは数少ない本国派遣の純血ポルトガル人と現地生まれのメスティ―ソ有力者になった。だからその時代には、ポルトガルの軍事要塞にいるのは司令官以下数人の高級将校だけが純血ポルトガル人で、下級将校と兵員は全員がメスティーソと解放奴隷であったり、船の船長一人だけが純血ポルトガル人で乗組員全員がメスティーソと解放奴隷であるというような例が普通に見られたそうだ。そしてそんなひとびとがアジアではポルトガル人とひとくくりに呼ばれていたのである。

共通の文化とそれを自己のアイデンティティにした人種的な複合体がアジアのポルトガル人だったということになる。ほんのわずかの純血ポルトガル人種と大多数のポルトガル系混血アジア人およびポルトガル文化に入ってポルトガル化した純血アジア人種がさまざまな論説の中にポルトガル人と書かれているひとびとの正体なのだ。

純血ポルトガル人の子孫である、アジア人とのプラナカンの場合はまだしも、人種混交とは無縁の純血アジア人の中にもポルトガルコロニーを運営する役割に加わったひとびとがいる。かれらまでもがアジアでポルトガル人と呼ばれる人間集団の中にいたのだから、アジアのポルトガル人というのがいかに人種的な枠組みから外れていたかが見えてくるにちがいあるまい。[続く]

「タンジドル（６）」（2023年10月09日）

インドのゴアやマラバール、コロマンデルあるいはセイロン、マラヤ半島のマラカなどにいた原住民は、ポルトガルに征服されたとき捕虜になって奴隷にされた。それらの土地がポルトガルコロニーになったあと、純血あるいは混血ポルトガル人のご主人様に仕える奴隷たちの中に、西洋文明に敬服して

ポルトガル人のようになりたいと憧れる原住民が出なかったはずがない。その者が利発で才能を持ち、精神性の豊かな人間であるなら、コロニー運営者にとっても優れた人材が増えるメリットが得られる。

ポルトガル人がその者をカトリック教徒にすることで、奴隷はポルトガル人種と対等の、神の前における兄弟になって奴隷身分から解放されたのだ。ポルトガルコロニーはそんなアジア人を受け入れて仲間にした。そこでも、血統や人種を基準に置かない「アジアのポルトガル人」の原理が使われている。

おまけにカトリック教徒になるための洗礼を受ける際に奴隷のご主人様が名前を与えたのだが、そのときに自分のファミリーネームを付けて奴隷に与えたから、解放奴隷たちもポルトガル風の姓名を名乗るようになった。文化的な同化現象だとはいえ、純血者も混血子孫も完璧な別人種である解放奴隷もみんながポルトガル風の姓名を名乗っていたポルトガルコロニーにおける社会生活は、異人種住民の間で文化的な一体感が強いものになっていたのではないかと推測される。

そういう人種的な複合体であるアジアのポルトガル人が水夫・兵隊・商人・宣教師・諸役の助手などになってテルナーテやアンボンあるいはジュパラ、マカオそして日本までやってきていたはずであり、日本に設けられたポルトガルの商館や教会にいたポルトガル人の中にインド人やムラユ人の顔や肌をした人間が混じっていた可能性は小さくないようにわたしには思われるのだが、このポイントを調査探求なさった先人はいらっしゃらないだろうか？

テルナーテやアンボンあるいはジュパラなどがポルトガルコロニーになっていた時代、アジアのポルトガル人たちは征服地土着の原住民をカトリック教徒にし、日曜日には教会で聖歌が歌われ楽器の伴奏がなされるのが普通の様子だったように思われる。日曜日も教会も、それを意味するインドネシア語はポルトガル語に由来している。

軍隊の演習やパレードがなされたとき、吹奏楽器と打楽器の楽隊がパレードの歩調を揃えさせた様子も目に浮かんでくる。それに絡んで、Burung Kakaktua というマルク地方の民謡を思い出した。昔書いた「ブルンカカトゥアの謎」という記事があるので、ご参考までに。

マラカをはじめとする各地のポルトガルコロニーがVOCに征服されたとき、アジアのポルトガル人たちが捕虜になり、VOCの奴隷にされた。その奴隷の一部がバタヴィアの市街建設ならびに運営のための労働力として連れて来られたとき、ポルトガルコロニー守備隊の軍楽隊員だった者が混じっていた可能性は小さくあるまい。

かれらが奴隷のままVOC軍の軍楽隊に編入されることはきっと起こっていたはずだ。VOC軍の兵卒はアジア人が圧倒的多数を占め、その中には自由人傭兵と奴隷兵士が入り混じっていた。ニッポンサムライは前者を代表するものと見られており、ウントゥン・スロパティというバリ人奴隷がVOC軍の将校に任じられて奴隷部隊を指揮していた例は後者を代表するものと言えるだろう。

VOC軍内の軍楽隊にポルトガル人奴隷が加わり、そこでタンジェドルという言葉が使われていたことはあり得るような気がする。17世紀半ばから後半にかけてそんな状況がバタヴィアにあったかもしれないと思われるが、タンジドルの由来と言われている18世紀前半のオランダ人ヴィラの奴隷吹奏楽隊とVOC軍楽隊がどのように結びつくのか、そこの橋渡しのイメージがわたしには湧いてこない。オランダ人ヴィラの奴隷楽隊が果たしてタンジェドルというポルトガル語で呼ばれていたのだろうか。自分の楽隊をわざわざポルトガル語で呼ぶ趣味がご主人様のオランダ人にあったのだろうか？[続く]

「タンジドル（7）」（2023年10月10日）

闇の中のそのラビリンスはしばらく置いておき、タンジドルの歴史の中に登場する「ブタウィのタンジドルの父」なるアウフステイン・ミヒウス Augustijn Michiels という人物に焦点を当ててみることにしよう。かれはバタヴィア奴隷の子孫であり、ボゴール県チトゥルップの大地主になって当時のジャワ島でナンバーワンの大金持ちと世間で評された。マヨールヤンチェ Majoor Jantje という名前の方が、巷では本人名よりもよく知られていたそうだ。

マヨールヤンチェの先祖はバタヴィアに連れて来られたティトゥスという名の奴隷であり、ベンガル人だったので Titus van Benggala と呼ばれていた。かれは洗礼を受けてクリスチャンになり、奴隷身分から解放された。多分ご主人様であるオランダ人のトアンミヒウスが洗礼親になったのだろう、ベンガルのティトゥスは１６９４年７月２日にティトゥス・ミヒウスとして自由人になった。オランダ人は解放奴隷のことをマルデイカ mardijker と呼んだ。インドネシア語 merdeka はそれが語源だという説がある。「独立している」という言葉が独立独歩自己主権を意味すると同時に自由と解放をも意味しているというのはインドネシアならではの語義だろう。

ティトゥス・ミヒウスはバタヴィア北東部のマルデイカ社会のコミュニティ総帥であるカピタンに任命されて、バタヴィア統治行政の一端を担った。ティトゥスの孫に当たるヨナタン Jonathan・ミヒウスが１７７６年に今のボゴール県チルンシの広大な地所を２９，５００レイクダルダーで購入し、続いて１７７８年に隣接するクラパヌンガルの土地を２６，４００レイクダルダーで買い取った。その地所にあった山がツバメの巣の宝庫だったことで、かれは莫大な埋蔵金を手に入れるのと同じ効果を得た。華人商人が争ってツバメの巣を買いにヨナタンを訪れたのである。バタヴィアのひとびとはチルンシとクラパヌンガルの丘陵地帯を鳥の山 vogelberg と呼ぶようになったそうだ。

ヨナタンは１７５９年にアグラフィナ・アブラハマと結婚し、ふたりの間にアンドリース、ピーター、アウフステイン、エリザベス、ヒルトライダの三男二女が生まれた。

１７６９年１月６日に生まれたアウフステインは成人してからタンジュンプリオッに近いパパンゴに居所を定めて、パンパンガース軍楽隊を統率した。オランダ人が Pampangers と呼んだのは、フィリピンのルソン島に住む、一般に Kapampangan と称されている中規模種族のひとつだった。曽祖父のティトゥスがパンパンガ一連隊長を務めていたという話があり、その関連でアウフステインが軍楽隊に関わったのかもしれないのだが、このフィリピン人の部隊がVOCにとって何だったのか、どんな素性になっていたのか、といったことはまったく判らない。

１８２０年末からアウフステインはパンパンガース軍楽隊を率いて、イギリスから返還されてオランダ

王国東インドになったジャワ島の都市部におけるパレードや式典、コンサートなどの公的な行事、あるいは私的なパーティなどでのエンタメ活動に邁進するようになっていった。

ひょっとしたら、このパンパンガース軍楽隊の隊員たちが適当なグループに分かれ私的に行っていた楽隊活動がブタウィ芸能のタンジドルにつながって行ったのだろうか。であるとするなら歴史学者たちの言う、豪壮なヴィラで奴隷たちが行っていた吹奏楽とタンジドルは間接的な関係にしかならず、系図の太い流れはパンパンガ―ス軍楽隊とタンジドルを直接的な血縁関係で結び付けることになりそうだ。

タンジドルとパンパンガ―ス軍楽隊のつながりは大いにありそうな話のようにわたしには思われる。だからこそ、タンジドル関係者たちがパンパンガ―ス軍楽隊を率いたアウフステインをタンジドルの父と呼んでいるのかもしれない。

ところが名前に使われているタンジドルというポルトガル語源の言葉は依然として闇の中に居座っている。果たして、フィリピンを出自にしているかもしれないパンパンガ一連隊の軍楽隊が自分たちの楽隊や音楽をポルトガル語で呼んでいたのだろうか？謎は深まるばかりだ。[続く]

「タンジドル（８）」（2023年10月11日）

われわれの記憶にまだ新しい20世紀後半ごろの現代タンジドル吹奏楽隊は、祝祭や式典に音楽の華を添える芸能としてもてはやされていた。ルバラン[5]・陰暦正月・大晦日などの祭りの日には、村から村を徒歩行進しながらマーチや歌謡曲を演奏して回り、ご祝儀を集めるのが習慣だった。

それはインドネシア語で amen と呼ばれる行為だ。家々を巡って音楽や歌や踊りなどの演芸を披露し、ご祝儀をもらう商売がアメンの本来的な語義である。日本でも昔は正月に獅子舞が家々にやって

[5] イスラム断食明け大祭

来て舞を披露し、祝儀の入った小袋を獅子の口の中に入れてもらうことが行われていた。日本の獅子舞もインドネシアで言うアメンなのだ。ジャカルタのオンデルオンデルも元々はプガメン pengamen（アメン演者）だった。

ジャカルタではアメン商売がだんだんとやりにくくなり、住宅地を回っても町内の家々がみんなぴったり扉を閉ざして居留守を決め込むから、プガメンたちは都バスや電車に乗り込んで乗客からご祝儀をもらうように変わっていった。昔は都バスに乗れば、ギターの弾き語りや詩の朗読などさまざまな芸を行う若者が入れ替わり立ち代わりバスに乗り込んで来たものだ。そのうちに乞食とアメンの境界線がぼやけてしまい、小さい子供がクチュレカンを鳴らしながら道路の交差点に赤信号で停まった車に銭乞いをする行為までアメンと呼ばれるようになっていった。

ジャカルタのアメン行為はバタヴィアが作られた時期にまでさかのぼることができる。バタヴィア建設者JPクーン総督が街中でのアメン行為を禁止する法令を出しているから、よほど目に余ったのだろうか？確か、その時期はスルタンアグンの軍事進攻の前だったから、ジャワ人のバタヴィア城市内潜入対策だったのかもしれない。

祝祭日を賑わすためにオランダ人トアンの奴隷楽隊も村から村を巡って演奏する行為を古い昔から行っていたのではないかという気がする。そして19世紀後半以降の解放奴隷楽隊も奴隷時代の習慣を続けた可能性は小さくなさそうだ。それが現代タンジドル楽隊まで続いて伝統化したように思われるのだが、1954年になってスディロ都知事がタンジドル楽隊のアメン活動を禁止した。

タンジドル楽隊は稼ぎの大きい柱を一本外されたことになる。それでも、役所の公的な儀式や私的な結婚パーティ・割礼祝・結婚申し込みや結納の行列・花嫁行列などの注文がたっぷり得られていたから、楽隊員の暮らしは安泰だった。

アメン活動禁止令がいつ解除されたのかよく分からないのだが、解除されたことは間違いないようだ。それでも村々を巡るアメン活動は下火になってしまい、その後はジャカルタコタで陰暦正月の１５日間に限ってタンジドルのアメン活動が行われている音が聞こえてくるありさまに変化した。

タンジドル楽隊はみんなジャカルタ辺縁部にあるため、都心部のコタまでやってくることになる。毎日そんな往復をするのは無理だから、楽隊員はジャカルタで寝泊まりする。かれらは１５日間自宅を離れて、ジャカルタコタの中国寺院で眠るのである。

１９９９年２月の陰暦正月の前夜、ジャカルタコタのグロドッ地区クムナガン通りの何百年もの歴史を感じさせる古い民家の表に置かれた椅子に6人の男性とひとりの女性が座っていた。みんな初老と言ってよい年齢に見える。男性たちはトランペット・クラリネット・コルノ・シンバル・タンブルを演奏している。コルノとはホルン、タンブルは大型ドラムのことだ。[続く]

「タンジドル（９）」（2023年10月12日）

あまり明るくない街灯の光に照らされている楽器も老齢に見える。ブラスの色も艶がなくなってほとんどきらめきを見せず、黒っぽく陰っている。おや、どの楽器もあちこちにへこみがあるぞ。トランペットもコルノも指かけがないではないか。リーダーのカマンさん５５歳が吹いているトランペットには W Bello Weltevreden の刻印が見える。

女性はシンデン、つまり歌手だ。それらの楽器がブタウィ曲の Jali-jali, Sri Kuning, Kacang Asin, Cap Go Meh などを合奏し、その伴奏でシンデンが唄うこともする。

家の主と家族が座って生演奏を愉しみ、隣人たちも集まって来て思い思いの場所で吹奏楽に聞きほれる。夜は更けていくが聴衆は帰宅しようとせず、反対に近くの寺院に詣でたひとが立ち寄るために聴

衆が増えていく。楽隊のみんなは増加する聴衆を前にしてはりきる。曲の合間にテーブルに置かれているブリキのヤカンに入った熱いコーヒーを自分のカップに注いで飲む奏者もいる。

このタンジドル楽隊はブカシ県南タンブンのカンプンプロの住民で、毎年陰暦正月前夜からグロドッにやってきて15日目まで寺院に泊まり込み、華やかに飾られた華人街に音楽の賑わいを添えている。15日目のチャップゴメー[6]の夜が終わると、楽隊は乗合バスに乗って自宅に帰るのだ。普段は農業労働者をしているかれらは、その15日間に一人当たり25万ルピアくらいの稼ぎを得て家に持ち帰る。普段の収入に比べたら、そりゃけっこうな金額だよ、とかれらは言う。

夜が更けても家に寝に帰ろうとする聴衆は見当たらない。陰暦正月前夜というのは大晦日のことなのだ。中華街は一晩中明るい光の中で新年を迎えることになる。楽隊のメンバーはみんなで Vihara Dharma Bhakti（金徳院）寺院の構内に泊まるつもりだが、今夜は身体を伸ばして寝ることはできないそうだ。寺院の周辺から構内に至るまで乞食が埋め尽くしているために横になって身体を伸ばせるスペースが得られない。乞食は1千人くらい出ているだろうという話だ。

この楽隊がタンブンから陰暦正月にコタにやってくるようになったのは1977年ごろからで、タンジドルの出演オーダーがさっぱり入らなくなったためにこの方法で埋め合わせを図ることにした。かつてこのグループは田舎でたいへんな人気を誇り、ボゴール県やブカシ県で結婚パーティや種々の祭事の出演に引く手あまただった。グループへの出演料は一晩200ルピアが支払われた。その当時の米の値段はおよそ3キロでわずか2．5ルピアだった。タンジドル楽隊はとてもいい稼ぎになった。だからかれらの黄金時代はあまり百姓仕事をせず、ミュージシャンで生計を立てていた。

かれらがタンジドル楽隊を始めたのは1955年だ。いろいろな管楽器と打楽器をそろえるには100ルピア必要だったから、その金を用意するために飼っている牛を売った。そしてふたりのタンジドル演奏家を招いて指導を受けた。

---

[6] 陰暦正月 15 日。福建語で「十五冥」。

楽隊としてやっていけるようになってから20年あまりのミュージシャン時代が続き、その後タンジドル斜陽時代がやってきて、挙句の果てに、一年に一度陰暦正月で稼いだあとは百姓仕事をするようになってしまった。かれらが物語ったタンジドル楽隊盛衰記がそれだ。

東ジャカルタ市チパユン郡ポンドッランゴン町では毎年 Hajat Bumi の祭りが行われている。年に一度催されるこの祭りは、豊かに得られた農産物 hasil bumi を神に感謝し、来年もまた同じように恵まれることを祈って行われるものだ。同時に居住者住民が無病息災で繁栄することを願い、加えて住民同士の友好と親睦をはかって種々の演芸が催される。

そのためにまず神事が営まれ、それが終わるとみんなで食事をし、お楽しみ編は音楽や踊り、あるいはゲームなども行われる。ハジャッブミの祭事はジャワ島で広く行われていて、sedekah bumi と呼んでいる地方もある。イスラム渡来前のヒンドゥ＝ブッダ時代から行われていた伝統行事と言われているが、現代のハジャッブミはきわめてイスラム色の濃いものに変化しており、豊作をもたらしてくれる神はイスラムの神に置き換わっている。[続く]

「タンジドル（10）」（2023年10月13日）

昔からポンドッランゴンで行われてきたハジャッブミでは、祭りを賑わすためにタンジドルやガンバンクロモンの楽隊が演奏しながらオンデルオンデルと一緒に往来を練り歩いた。今でもガンバンクロモンやオンデルオンデルはその姿を見せてくれるものの、タンジドル楽隊の姿がかき消えてしまった。ポンドッランゴンのハジャッブミに関する2008年のコンパス紙記事には、タンジドルのいまだ健在な姿が登場している。

10台くらいのピックアップトラックが行列を組んでポンドッランゴン町の狭い道路をゆっくりと走る。その中の1台は荷台にタンジドルの楽隊が乗って賑やかに音楽を奏でており、別の1台にはガンバンクロ

モンの楽団が乗って祭りの賑わいを盛り上げている。祭りの会場は地元民が墓地に使っている共有地だ。そこには町の創設者と信じられているウユッ翁とクドゥン翁の墓があり、祭りは祖先の霊を巻き込んで行われている。

ポンドッランゴン町でこの祭りがいつから始まったのか、知っている者はひとりもいない。あるとき誰かが発起人になって村祭りが行われたのだろう。それが伝統となり、歴代の子孫が伝統を守り続けている。地元民の中にこの祭りを pesta Gantjeng と呼ぶ者もいる。

キガンチェンは村の創設者たちの墓守だった。この墓守の墓もそこにあり、ひとびとはガンチェンの聖墓と呼んでいる。キガンチェンは1967年に113歳で没した。だからガンチェン祭りという言葉はまだ百年経っていないことになる。しかしポンドッランゴンのハジャッブミの発端がそんな最近だったとは思えない。

ともあれ、昨今のポンドッランゴンのハジャッブミはお楽しみ祭りの印象が明らかに濃い。三日間続けられるハジャッブミでは、ブタウィのさまざまな娯楽演芸を愉しむことができる。Topeng Betawi や Wayang Golek などが夜な夜な演じられるのである。残念ながらタンジドルはもういない。

南ジャカルタ市ジャガカルサに Tiga Saudara という名前のタンジドル楽隊がある。2006年3月のコンパス紙にこの楽隊を取材した記事が載った。地元民のサイッ・ネレンさんが楽隊のオーナーで、バンドリーダーと世話人を一手に引き受けている。かれは先祖代々の生粋ブタウィ人だ。先祖はその一帯の広い土地を持って果樹園にし、果実の販売で暮らしてきた。

サイッは1948年にカンプンカンダンで生まれた。かれの生家が建っていたおよそ7千平米のその土地にはさまざまな果樹が植えられていた。1970年代にラグナン動物園が建設されるため、カンプンカンダンの土地を政府が買い上げた。かれの生家は今動物園の一画になっていて、そこに住人はひとりもおらず、住んでいるのは動物だ。「よく知らないが、多分虎か鹿が住んでるよ。」サイッはそう冗談めかす。

かれは1973年にそこから近いクチャピ通りの4，120平米の土地に家を建てて住むようになった。果樹園の中の家で、典型的なブタウィ様式の家屋だ。昔はこんな家でもお屋敷と呼ばれたが、今の時代ならあばら家だよ、とサイッは言う。

ブタウィ様式の家屋では、家の裏手に客人専用の浴室が作られている。ブタウィ人は住んでいる家族や別の家に住んでいる親戚が来たときに使うスペースと客人のためのスペースを厳格に区別した。客が来ると家の表テラスで応接するだけで、客を家の中に入れようとしない。家屋の表テラスは屋根と柱と垣だけで壁のない広いスペースになっている。家によって異なるが、壁で囲まれた家族の居住空間と来客テラスをそれほど違わない広さにしている家もある。もしも来客を家の中に入れたりしたら、子供の結婚話じゃないかとすぐ隣近所に噂が立つそうだ。

表テラスは応接間なのだから、家の者がそこで寝転がったりするのは世間体が良くない。だから家族専用の寝転がりテラスを家の横に設ける人も多い。コンパス紙取材班はサイッの家の横のテラスに招じ入れられて取材インタビューが行われた。[続く]

「タンジドル（１１）」（2023年10月16日）

サイッの一家がタンジドルに関わるようになったのは娘婿のためだった。サイッの義理の兄になったバンジルは当時盛んだったタンジドルのプレーヤーで、またレノン役者でもあった。バンジルは自分のタンジドル楽隊を持ちたかったようだ。広い果樹園で生計を立てていた父親のネレンが30万ルピアの大金を払ってタンジドル楽隊用の楽器一式を購入した。1960年代はじめごろのことだ。今なら2千万ルピアくらいに相当するだろうとサイッは昔を振り返る。

バンジルはサイッや他の希望者を集めて楽隊を組むことにし、自分と仲間たちで素人楽隊に音楽と楽器演奏を教えた。かれらは金管楽器をすべてトロンペッと呼んでいたようだ。trompet piston, trompet trombon, trompet bas, trompet tenor そしてクラリネットは suling。

この感性の音楽に楽譜は使われないのが普通だ。耳をつんざく明るい華やかな音のアンサンブル。オランダ人が東インドに持って来たこの音楽は今やブタウィ人の感覚に彩られてローカル音楽と化した。レパートリーの多くは奏者たちのなじんだブタウィ音楽、Poho Ke Balik, Ketapang Sono, Jali-jali, Stambul, Gaplek, Kembang Kacang, Parsi など。だが行進するときにはマーチも忘れない。タイトルさえもが Mars Jalan。

こうしてタンジドル楽隊が活動を開始したが、あまり長続きしなかった。リーダーのバンジルがタングラン監獄に入れられ、病気になって獄舎で死亡したのである。

バンジルは共産党に入ったのだ。インドネシア共産党は農村部の土地なし農民に土地を分配する方針を宣伝して農村部で勢力を強めていた。そしてG30S事件が発生し、クーデターは鎮圧され、共産党は非合法化されて党員はすべて犯罪者として監獄に入れられた。中にはストリートジャスティス（いやヴィレッジジャスティスと呼ぶべきか？）で葬られた者も少なくない。それが全国的に行われて総勢数万人と言われている大量虐殺に発展したのである。

このレッドパージをインドネシア在住華人に向けられたものと誤解した論調も出されているようだが、その傾向がまったくなかったとは言えないものの、インドネシア共産党員＝華人系インドネシア人という構図にはなっていなかったのであり、共産主義宣伝班はローカル芸能を使って下層労働者や農民をシンパにすることに成功していたから、党の宣伝班に使われたプリブミ伝統芸能関係者も大勢がパージの対象にされた。共産党とは無関係なのに、村で嫌われていた地元民や村の有力者に盾突く者もたくさん共産党員のラベルを貼られて姿を消した話がジャワ島にあふれている[7]。

１965年の話だから、バンジルがリーダーをしていた頃だろう。ポンドッランゴンで結婚パーティの出

[7] 1990 年代中盤にジャワではニンジャと呼ばれる組織的殺人集団が暗躍した。彼らは夜間にトラックで乗り付けて北海岸沿岸の村落を襲い男性、特にイスラムの指導者を殺害した。これは 1965 年頃に共産党員として誣告された人達の復讐であると聞いたことがある。

演仕事が入ったので、当日午前10時にサイッは重い楽器を手に提げてジャガカルサの家を出た。徒歩で会場まで行こうというのである。地図上の直線距離は10キロそこそこだが、ジャカルタの街道は昔すべてが南北に通っていて、東西を遠距離で結ぶ道路は限られていた。ジャカルタ南部のその地域に昔あったのは近くの村と村を結ぶ道がほとんどだったから案の定、若きサイッは道に迷ってしまい、会場にたどり着いたのは真夜中だったそうだ。楽隊のメンバーがひとりくらい欠けていても、タンジドル楽隊の演奏はなんとかなったようだ。

サイッは共産党と関りを持たなかったが、リーダーの義兄がいなくなったために楽隊は活動できなくなった。父親のネレンはサイッに強く言い聞かせた。タンジドルの楽器は絶対にひとつも売ってはならない。楽器ができるひとに貸すのはかまわないし、おまえが使うのもかまわない。しかし絶対に他人に売るな。ネレンの家に管打楽器があることは地元のたくさんのひとが知っており、使われなくなった楽器を買いたいというひとが遠方からもたくさんやってきたが、サイッは父の遺言を守った。

ある日、タンジドル愛好者のハジクマッが楽隊を復活させることをサイッに勧めた。このハジがあちこちを回ってタンジドル演奏の注文を取ってきてくれた。楽隊は再出発した。[続く]

「タンジドル（１２）」（2023年10月17日）

タンジドル用楽器の置き場はサイッの自宅のひと部屋。そこにはタンジドル楽器だけでなく、ガンバンクロモン用の楽器も置かれている。その楽器専用の部屋では、毎週木曜日の夜にお供えが置かれる。水・コーヒー・茶の入ったコップがいくつか載ったお盆が部屋の中に置かれて香が焚かれる。コーヒーと茶は甘いのと甘くないのが両方供えられる。それらはそれぞれの楽器に憑いている番人[8]に捧げるためのものだ。楽器が良い音を出してくれるように。そして奏者に福と恵みと健康をもたらしてくれるよう

[8] 守護霊

に。お供えの飲み物がいろいろ取り揃えられているのは、楽器の番人たちにそれらの中の好きなものを飲んでもらうためだそうだ。いつも甘くない茶を飲んでいる番人でも、たまには甘いコーヒーを飲みたくなることもあるだろう。

楽器の中でもっとも神聖視されているのが一番古いトロンペッバスで、この楽器は１８９４年にオランダの Tilburg で作られた。MJH Kessels 1894 という刻印が彫られている。あまりにも古いから、楽器本体のほぼ全体にわたってハンダの痕が点々と銀色に光っている。どんなに古くなっても、その楽器は演奏のときに必ず狩り出される。楽器は使われないと壊れてしまうとサイッたちは信じているから、独立記念日の祝祭にこの楽隊が参加したときでも、南ジャカルタ市庁が楽器を寄付してくれたというのに、百年を超えるトロンペットバスも使われて音を出した。

２００６年３月のある日、タンジドル「ティガサウダラ」はデポッ市カンプンリモの旧家で催された結婚パーティーに出演した。午前９時から夕方５時まで、休憩を交えながら演奏するのだ。

そろそろにわか作りの舞台で演奏を開始しようというころ、楽器が置かれているテーブルを前にしてサイッは神妙な顔つきになった。よく見るとそのテーブルには楽器の他に竹編みの盆が載っていて、盆には米・バナナ・野菜・おやつなどが置かれている。また種々の飲み物の入ったグラスも並べられているが、だれもそれらに手をつけていない。

サイッは火の入った素焼きの香炉に粉末の香をふりかけると、立ち上がって口を動かしはじめた。呪文を唱えているのだ。唱え終わると各楽器の一部分を、香油をつけた指先で撫でた。メンバーのひとり、ハジクマッが記者に説明した。この催しが催行者の期待通りに無事進行し、その進行の中にいるわれわれも順調に務めが果たせますようにという祈りを捧げているのだ。それぞれの楽器も機嫌よく演奏者とコラボしてもらわなければならないのだから。

サイッが行った祈りの儀式はジャワ島の農業社会で一般に行われているハジャッブミのようなものだろう。そこに西洋楽器の姿が混じっている、と言うよりむしろ対象にされていることに記者は驚いた。記者はきっとそんなイメージを持ったことがなかったのだ。

ティガサウダラの演奏が始まった。結婚パーティーに招かれた客人の中の高年齢者たちは音楽に聞きほれている。まだ若かったころ、タンジドルはかれらの日常生活の中にあったのだ。華やかな管楽器のサウンドがかれらを追憶の境地に誘っているのかもしれない。だがそんな時代を知らない者は、ましてや小さい子供たちは「おやっ、こりゃ何だ？」という戸惑いの中に迷い込んだ気分かもしれない。しばらくはおとなしかった小学生くらいの子供たちが「ダンドゥッをやれ」と言い出した。

一曲終えた楽隊がそのリクエストに応じるために次のナンバーを相談する。そして二曲目はダンドゥッ曲になった。すると今度は高年齢者たちが「合わない、合わない！」と言い出す始末だ。しかしティガサウダラは二曲目もきっちりと終えた。

この種のパーティでの生演奏では、楽隊は女性歌手を連れて来る。この日、ステージ衣装を着た女性歌手が三人も舞台の端に座っていた。派手な赤色のカインクバヤに身を包んだスンダ歌謡のプシンデン、紫色のクバヤを着たブタウィ歌謡の歌手、そして白の上下に厚化粧の顔で笑みを浮かべるダンドゥッ歌手。スンダ歌謡やダンドゥッのナンバーを演奏する場合はスリンやクンダンあるいはゴンが加えられて、雰囲気が高められる。[続く]

「タンジドル（１３）」（2023年10月18日）

世間の音楽の好みがバリエーションを広げる一方のこの時代、既に辺縁部に追いやられてしまったタンジドルはサバイバルの道を探さなければならない運命にある。だが老齢に入ってしまった現メンバーの若返りは思うにまかせない。いくらタンジドル音楽がお気に召す若者がいたとしても、楽器演奏の才能がフィットしなければメンバーとして使えないのだ。それが最大の障害になっている。管楽器の演奏能力を身に着けるのは生半可なことではない。おまけに苦労して楽器ができるようになったところで、タンジドル楽隊で食っていくのは今の時代、すでに至難の業になっている。

管楽器のある人生を生きようとするなら、もっと収入の大きい音楽世界に入らなければならない。もはや息絶え絶えのタンジドルで稼ぐのは不可能だろう。おまけに音楽の好みが世代間で変化したから、昔スタイルの吹奏楽隊をカッコイイと思う若者がどれほどいるだろうか。

この楽隊に演奏の注文は多いときでひと月に3～4回入る。結婚パーティー・割礼祝・行政高官の就任式典・独立記念日などの催しで会場に生音楽の賑わいを添える仕事だ。ギャラは出演した人数によって2．5百万から6百万ルピアという差がつく。その金額が楽隊メンバーの全員に分けられる。ティガサウダラの仕事がないとき、メンバーたちはチガンジュルやカリサリの別のタンジドルを手伝いに行くこともある。それでも、ひと月の自分の家庭の生計をタンジドル仕事だけでまかなうことはできない。

サイッのように自分の土地を持っている者は果樹園や借家で収入を確保しているが、そうでない者は建設現場などで肉体労働をする。それでも生活の金に困ることがときどき起こる。そんなとき、かれらは楽隊仲間に頼るのが普通だ。

音楽演奏で食っていくためには、世間に売れる音楽を演奏しなければならない。かつてタンジドルは売れる音楽だったが、今ではダンドゥッが覇者にのし上がった。舞台でタンジドルを演奏しているかれらにダンドゥッ曲のリクエストがかかるのもしょっちゅうだ。必然的にかれらはダンドゥッ曲をいくつかレパートリーに加え、ダンドゥッを唄える歌手を連れて行くこともする。しかし本格派ダンドゥッバンドが作り出す雰囲気にはかなわない。この先、世代交代が進行すれば、タンジドルは忘れ去られるかもしれない。

今でさえ現役のタンジドルメンバーの中に生活に困っている者が何人もいる。しかしかれらはタンジドルを捨てようとしない。自分の人生の中に自分の好きなものを持っている人間の満足感がそうさせているのだろう。

その好きなものが自分の生きるための糧をもたらしてくれるなら言うことはないだろうが、今のタンジドルにそれを望んでも無理だ。息絶え絶えのタンジドルをそんなかれらが生き永らえさせているのである。

２０１４年３月のコンパス紙にサイッ・ネレンさんの記事が出た。やっとその年の初オーダーがティガサウダラに舞い込んだので、久方ぶりの本番に備えて練習をしておこうということになり、サイッはメンバーに集合をかけた。練習の前にかれは楽器置き場のタンジドル楽器の状態をすべてひとりでチェックした。

夕方になって、サイッの自宅の表テラスに８人のメンバーが集まった。若い人の顔が混じっている。若者のひとりはかれの息子、他の若者は親戚の子たちだ。かれらはサイッに説得されてティガサウダラを維持するために吹奏楽器を学び始めた。[続く]

「タンジドル（１４）」（2023年10月19日）

音合わせをしてから合奏が始まる。まず行進曲 Mares Jalan。続いて歌謡曲 Kicir-kicir、さらに Hujan Gerimis。けたたましい音楽が隣近所の住民を呼び集め、２０人くらいのにわか聴衆が集まって音楽鑑賞をする。サイッは隣人のひとりンポヌルに唄うように勧めてムラユ曲の Seringgit Dua Kupang を演奏し始めた。

Jalan-jalan ke Kota Paris

lihat gedung berbaris-baris

Paling senang sama Bang Kumis

orangnya ganteng sangat romantis

・・・

練習していると客がやってきた。議員立候補者と選挙運動チームだった。この候補者はブタウィの伝

統芸能プロモートを公約にしているので、ぜひ皆さんの一票をと呼びかける。おかげで練習はお流れになった。

候補者一行が帰ったあと、サイッは記者にもらした。「世の中へのプロモートもいいんだけど、タンジドルは演奏のオーダーをくれるのが一番いいんだよ。でないと、タンジドルは生き残れない。」

１９９０年代初めごろまで、タンジドルへの注文はあふれんばかりにやってきた。何かの催事を行うとき、吹奏楽隊がいないのは塩の効いていない料理のように思われていた。結婚・割礼・出産などの祝い事にタンジドルが出ないとしまりがない、とみんな思っていた。そのころティガサウダラは、仕事のない日がひと月のうちに2日くらいしかなかった。今は仕事が一年のうちで2回あるかないかだそうだ。

チジャントゥンのタンジドル楽隊プトラマヤンサリのリーダーであるソフィヤンさん４０歳もサイッと同じような話をする。１９８０年代は毎日あちこちの村で仕事があった。ところがダンドゥッの人気が高まって、しかも謝礼が廉く、すごいビートで乗りまくるから、９０年代に入ってからタンジドルは祝い事の出演がどんどん減っていった。

ソフィヤンは生計のために大手スーパーマーケットの社員になっているが、タンジドルのオーダーが毎月コンスタントに最低6件得られるなら、自分はマヤンサリの仕事に専念したいと語っている。それだけの仕事すら得られないから、かれはスーパーマーケットで働いているのだ。

ソフィヤンは１９４１年に結成されたタンジドル楽隊マンドルニミンの5代目子孫に当たる。楽隊を作った初代のニミンは息子のリシンに楽隊を引き継いだが、リシンの後継者は婿のニャアッと息子のナウィンのふたりできた。ニャアッはその息子のマルタが継いだ。マルタがソフィヤンの父親だ。ナウィンの後継ぎはバンピイェ。

オーナーで世話人でリーダーの一家の中の誰かが後を継がないと、タンジドル楽隊は消滅してしまう、とかれは語る。かれも親族でない誰彼かまわず、タンジドルを教えている。習いたい者が楽器演奏を教えてもらいたいだけなのか、それともタンジ音楽が好きで来ているのかはよくわからない。でも、他

の音楽をやっている者はたいてい、タンジドルが好きになるようだ、というのがソフィヤンのコメントだった。

タングランのタンジドル楽隊アルジャバルのリーダーであるジャイプ・プトラ・ジャバルさん65歳も7年前から楽隊の若返りに努力している。かれはもう20人くらいの若者にタンジドル演奏を教えた。教え方は1960年代にジャイプが祖父から教わった時そのままのやり方だ。まず祖父が演奏して手本を示す。それをジャイプがそっくり真似るのだ。タンジドルミュージシャンは楽譜を使わない。[続く]

「タンジドル（終）」（2023年10月20日）

しかし時代は変わった。今はお手本をスマートフォンに録音し、弟子はそれを真似する。ジャイプは祖父から教わった曲をすべて録音した。Kembang Kacang, Glatik Nguknguk, Balo-balo, Kramat Karem などの古典曲を含めて。それらはかれの祖父が生まれる前からあった曲だそうだ。祖父は何年生まれですか、と記者が尋ねるとかれは答えた。

「判るわけがないよ。昔のひとは子供の生まれた日付を書き留めるなんてことをしなかったんだから。」[9]

タンジドルに由緒のあるボゴール県チトゥルップでは楽隊が消滅して長い年月が経つ。何かの催事にタンジドルが出ていれば、その楽隊はよそから招かれたもの以外にありえない。地元の音楽関係者によれば、1990年代が地元の楽隊の最期だった。華人コミュニティがチャップゴメーの祭りを催すとき、タンジドルは他の地域の楽隊を招かなければならない。

[9] インドネシアで戸籍が整備されたのは 1958 年でそれ以前に生まれた人のほとんどは年齢不詳だ。

地元民のピピッさんはタンジドル楽隊メンバーを職業にしてきた。地元の楽隊がなくなったあと、ピピッはチジャントゥン・パルン・デポッなどの楽隊によく誘われて舞台に上った。「チトゥルップにはもう楽隊はないよ。持ち主が楽器を全部売り払った。わしも卒中を患ってから楽器が吹けなくなってしまった。」

２０１４年３月にジャカルタのブンタラブダヤでタンジドルパレードと題するプログラムが催された。参加したタンジドル楽隊には若者の姿がたくさん見られた。参加したグループは次の通り。Tanjidor Tiga Sodara, Tanjidor Pusaka Tiga Sodara, Tanjidor Irama Jaya, Sanggar Sinar Betawi, Sanggar Betawi Si Pitung。その中には昔ながらの吹奏音楽隊もあったが、レノン演劇やジャイポガン舞踊などとタンジドルの組み合わさった新しい試みも紹介された。

新しい世代は昔ながらの吹奏楽隊のあり方を変身させて、新しいタンジドルの居場所を探しているように見える。社会の嗜好が昔ながらの吹奏楽隊を見限ったのだから、その社会の若者たちがタンジドルに向ける姿勢もおのずと変化するのが自然の摂理だろう。

タンジドルが変身したとき、タンジドルという名前で呼ばれることがいつまで続くのか、それは先の読めない話だ。しかしタンジドルという名称はひとびとの記憶の中に生き続けるかもしれない。

２０１４年３月にコンパス紙がジャボデタベッ住民６２７人から集めた統計調査によれば、良く知られたブタウィ芸能の第３位にタンジドルが置かれていた。その内容はこうだ。

１　Ondel-ondel　５７．８％

２　Lenong　２５．０％

３　Tanjidor　４．８％

４　Gambang Kromong　４．０％

５　Tari Topeng Betawi　２．９％

タンジドル楽隊を雇って音楽を演奏させようという気持ちは社会の中からほとんど消え失せたようだ

が、その名前だけは社会記憶の中に生き残っている。

大都市ジャカルタの市民生活の中からタンジドルも、そしてガンバンクロモンも姿を消した。それらの音楽を生で聞きたければ、祭りの日にブタウィ伝統村を訪れることでめぐり会えるかもしれない。しかしタンジドルも他の演芸とのコラボに向かっている状況を見る限り、タンジドルの本性だった行進音楽隊としての姿と音は既に歴史の中に埋没したような印象を受ける。

タンジドル吹奏楽隊は昔、カリマンタンにもあった。西カリマンタンにはまだ残っているが、南カリマンタンでは絶滅したそうだ。[完]

編集 2023/10/30